

語用論研究の歴史

林智昭
京都大学大学院

1 はじめに

20世紀、哲学的な見地からはじまった語用論は、2011年現在、新たな展望を迎えつつある。「語用論」という分野は、何を扱うべきなのか。「語用論」というパラダイムは、時代的特徴の影響を強く受け、言語現象に対するアプローチを変化させ、今後も歴史的出来事の影響を受けて変化していくべきものである、というのが本研究の主張である。哲学を起源とし、Austinの発話行為論、それに新たな観点を与えたSearl、「会話の公理」を提唱したGrice、協調の公理の問題点を明確化した関連性理論、認知言語学のアプローチに立脚する認知語用論、そして2011年に提唱されたCyberpragmatics、及び言語教育への応用アプローチである。パラダイムの変化には、時代を通して変化する言語に加え、インターネットという新たな言語生成の場の出現が大きく影響している。本発表では、語用論の歴史を概観することによって、語用論が研究対象とするものが、時代とともに変遷してきたことを示していく。

2 語用論研究の歴史

2.1 哲学者Austin, Searlの言語行為

Austin(1962)は、発話を「叙述的発話(constative utterance)」と「遂行的発話(performative utterance)」に分類した(小泉 2001)。前者は、事実の「真偽性」、後者は発話機能の「適切性」が問題となると論じた。弟子にあたるSearlは、言語使用を「構成的規則」に従って行為を遂行するものであるという立場に立脚し「言語行為論(Speech Act Theory)」を確立した(小泉 2001)。

2.2 Griceの会話の公理

Griceは、1967年、ハーバード大学で“Logic and Conversation”(「論理と会話」)と題する講演を行い、その中で「言外の意味」を「会話的推意」(conversational implicature)と提示した(小泉 2001)。Griceは、「協調の原

則」として「量の公理」「質の公理」「関係の公理」「様態の公理」として、会話を進める際に働く4種類の原理を提示した。

2.3 関連性理論と産出語用論

D.ウィルソン・T.ウォートン(2009)では、Griceの提示した「関係の公理」の問題点を克服するため、「関連性」という概念の定義を明確にしたものが「関連性理論」とであると説明されている。両者の提唱した「関連性理論」は、人間の「認知」というメカニズムを、「認知効果（人が情報を得て、どの程度認知環境の改善が起きたか）」「認知効果を受けるために必要なコスト（processing effort）」という2要素で決定される「関連性」という概念を用いて説明を試みたものである。「関連性理論」は語用論の主要な一派をなすが、言語「解釈」のための理論であり、人間の言語産出メカニズムを対象とする「産出語用論」への応用などが期待されている（今井 2001）。

2.4. 認知語用論からのアプローチ

認知言語学は、私達が環境との相互作用による身体的な経験の中で生まれた五感、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的経験が反映されたものとして言葉を扱うものである（山梨 2000）。「認知語用論」においては、とは、この認知能力の観点から、言葉の使用と解釈の諸相を追求していくものである（小泉 2001）。崎田・岡本(2010)では、「生きた言語使用の文脈」という観点から、「認知語用論」に基づく分析が行われている。

2.5 今後の展望

Yus(2011)は、インターネットにおいて観察される「顔文字」などの特徴的な言語を「Cyberpragmatics」として分析することを試みた。インターネット空間上の言語が“pragmatics”として研究され始めたことは、語用論研究が対象とする言語生成の場として「インターネット」という存在が注目され始めていることを示している。

また、山梨(1986)では、「語用論」が扱うべき対象は、「発話の参与者や文脈から独立した記号体系」としての「文法」とは区別されるものとしての明確な線引きが必要であると論じられているが、「文法」と区別した上での「語用論的能力」を、言語教育への応用を主張する研究の試み、提案も数多く行われている。

3 おわりに

言語教育への「語用論的能力」の重要性、インターネット上の言語記述を目的とするパラダイムの提唱など、語用論は研究の対象を広げつつある。時代とともに、語用論の研究対象も多様化し、教育応用への活用可能性も期待され、様々な実践的試みが行われている。時代とともに「語用論」が対象とする範囲は拡大・多様化し続けてきた。今後も、関連分野をはじめ多様な研究分野への横断的・連携的貢献とともに、新たな研究の視座を創造していく可能性が期待される。

参考文献

- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. (ed. by J. O. Urmson and M. Sbisa. 1975) Oxford: Clarendon Press. (坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』 東京: 大修館書店)
- D.ウィルソン・T.ウォートン, 今井邦彦(編). 2009. 『最新語用論入門 12 章』 東京: 大修館書店.
- Francisco Yus. 2011. *Cyberpragmatics: Internet-Mediated Communication in Context (Pragmatics and Beyond. New Series)*. Amsterdam: John Benjamins Pub Co.
- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (清塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』 東京: 勁草書房)
- 今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』 東京: 大修館書店.
- 小泉保. 2001. 『入門語用論研究—理論と応用—』 東京: 研究社.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳(1987) 『語用論』 東京: 紀伊国屋書店)
- 崎田智子・岡本雅史(著). 山梨正明(編) 2010. 『第 4 巻 言語運用のダイナミズム(講座 認知言語学のフロンティア)』 東京: 研究社.
- 山梨正明. 1986. 『新英文法選書 12 発話行為』 東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.